

スムットニー祐美

茶の湯と

イエズス会宣教師

中世の異文化交流

思文閣出版

目次

序論	3
第一章 異教徒の地への適応主義に基づいた宣教方針	12
第一節 イエズス会創立の経緯	12
第二節 エンリケスの宣教方法	16
第二章 ルイス・アルメイダの茶会体験報告	24
第一節 アルメイダが堺の都市を訪れるまでの経緯	24
第二節 アルメイダが認識した茶の湯	29
第三章 ルイス・フロイスの茶室に関する報告	46

第一節	フロイスが認識した茶室……………	46
第二節	日本における適応主義に基づいた宣教の実態……………	50
第四章	通辞ジョアン・ロドリゲス『日本教会史』から 巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノの宣教方針への道程……………	65
第一節	ロドリゲスが『日本教会史』を編集した経緯……………	65
第二節	ヴァリニャーノの日本視察までの経緯……………	70
第三節	ロドリゲスとヴァリニャーノが認識した日本の礼儀作法……………	82
第五章	ヴァリニャーノが茶の湯から導き出した適応主義に基づく宣教方針……………	97
第一節	ヴァリニャーノが意図したイエズス会の茶の湯者「同宿」……………	97
第二節	イエズス会修道院内の茶の湯によるもてなし……………	124
第三節	ヴァリニャーノが認識した茶の湯の精神性……………	162
結論……………	……………	176

史料 「日本管区規則」(ローマイエズス会文書館 Archivum Romanum Societatis Iesu 所蔵)

「同宿規則」 f.99-100: *Regras pera os dojucis*

「客のもてなし方規則」 f.101v-103v: *Regras do que tem conta de agasalhar os hospendes*

「茶の湯者規則」 f.106v-107v: *Regras pera o Chanoyuxa*

「受付規則」 f.108: *Regras pera o Porteiro*

参考文献

あとがき

索引

序論

一六世紀末、いわゆる戦国時代に、ヨーロッパから一五四九年（天文一八）のフランシスコ・ザビエル（Francisco de Xavier, S. J. 1506-1552）を最初として、イエズス会宣教師がキリスト教布教のために来日した。彼らは在日中、文化や人々の生活習慣などの情報収集と分析を行い、日本人にふさわしい宣教の糸口を模索していた。その一つが、日本人の間で盛んに嗜まれていた茶の湯であった。

本書は茶の湯とキリスト教との関わりについて、これまで具体的な形では示されてこなかった史料を提示し、文化史的地見地から明らかにすることを目的とする。その史料とは、筆者が二〇一二年にローマイエズス会文書館（Archivum Romanum Societatis Iesu）より収集したイエズス会士の文書である。本書では本史料原文（ポルトガル語）を日本語に翻訳して示す。^{（一）}

○適応主義に基づく宣教

一五七九年（天正七）、イエズス会東インド管区巡察師アレックスサンドロ・ヴァリニャーノ

(Alessandro Valignano, S. J. 1539-1606) は、九州の口之津（現在の長崎県南島原市）に上陸した。来日の主な目的は日本の宣教事情を調査し、イエズス会総長に報告することと、すでに派遣されている会員への指導であった⁽²⁾。巡察師はすでに視察当初において、日本の事情がこれまで自身が宣教活動を通して体験した文化や風習とはまったく異なっており、ヨーロッパから携えてきた宣教方法は、そのまま実践できないことを認識していた⁽³⁾。そこで異文化の中で宣教を展開する手段として、布教地の儀礼や習慣、言語などを採り入れた「適応主義」、ポルトガル語で“*accommodatio*”、英語で“*accommodation*”と呼ばれる布教政策を採用し、日本社会にキリスト教を伝道するための工夫と調整を図ったのであった。

この適応について『カトリック大辞典』Iには「アコンモダチオ（布教上の慣習適応）」という項目があり、「布教対象への布教主体の適応を指し、布教に当り布教地の民族精神及び生活形態に成る可く適応せんとする布教上の凡ての努力を包括する」と定義され、「その目的は新しき布教地に教会の根を張らしめることにある」とある⁽⁴⁾。さらに同辞典には、「アコンモダチオは唯だ外部的生活（衣食住）、土語（布教地に於けるラテン典礼語の問題もこれに属する）、民族芸術、美術（建築、絵画、彫刻、音楽）、社会及び法律観並びに教会生活形式に当つての其の考慮等のみ及ぶ」とも定義され、これを適応の範囲とした⁽⁵⁾。第二ヴァティカン公会議以降の現在では、適応とは「カトリック教会で、福音の本質を変えることなく、時代、場所、異なった文化のなかで、福音の表現を変え、そのより深い理解、

受容を目指すことを意味する」と解説されている。⁽⁶⁾ ヴァリニャーノは異教徒地域への宣教のため、結果的に現在の定義の適応主義という手法を採ったといえる。

この適応主義政策により、茶の湯はイエズス会の布教活動にとつては重要なものとなった。彼は茶の湯とはいかなるものか、日本人が茶の湯にどのような価値をもっているかなどという多岐に渡る調査を行い、最終的には茶の湯を同会の規則に盛り込んだ。これにより日本人との接点を見いだし、布教の礎を築いたのである。

○先行研究

イエズス会が上流階級層を中心として日本人と交流を図るために、巡察師ヴァリニャーノの指導によつて茶の湯を宣教活動に採り入れたことは、これまでも先行研究やイエズス会文書の邦訳によつて示されてきた。倉澤行洋氏は『東洋と西洋——世界観・茶道観・藝術観——』の中で、ヴァリニャーノが一五八三年（天正一一）に作成した『日本イエズス会士札法指針』を用いて、イエズス会が日本の風土や文化を採り入れ、そこに茶の湯が含まれていたことを示した。⁽⁷⁾ 倉澤氏はこの宣教方針を、積極的順応主義と称している。泉澄一氏は『堺——中世自由都市——』の中で、ヴァリニャーノが一五八一年（天正九）に作成した『日本巡察記』を扱い、教会内における茶事の必要性を認識していたと記述している。その理由について泉氏は、ヴァリニャーノが日本の習慣にしたがわなにかぎり、

日本人との交流関係を築くことができないうと実感したためであると解説した。⁽⁸⁾

以上の研究者のほか、本書の目的と意図を踏まえれば、先行研究として敬意をもって岡田章雄氏『外国人の見た茶の湯』に収録されている「キリシタンと茶の湯」を取り扱う⁽⁹⁾。岡田氏は倉澤氏と同様、『日本イエズス会士礼法指針』を扱い、宣教活動を成功に導く手段として、当時の社交儀礼であつた茶の湯を布教方針に採用していたことを明らかにした。以下、岡田氏の研究要旨を示す。

①これまで上流社会の間で嗜まれた茶の湯が、特に堺の豪商の莫大な富の力の上に築かれ、のちには一般の町人にまで普及したことを明らかにした。

②『日本イエズス会士礼法指針』一五四項目を挙げ、ヴァリニャーノの指示による教会堂や修道院内を建築する際の必要条件について論じた。その条件とは、座敷と茶室が隣接され、周囲には縁側が備え付けられるという日本人の習慣や風俗などを採り入れた設計である。

③『日本イエズス会士礼法指針』一五五項目を挙げ、ヴァリニャーノが権力者や領主たちが集まる都会に建設する施設に対し、特別に神経を注いでいると指摘した。岡田氏は、もてなしの道具を収納する戸棚、吸物や点心を調理する炉という具体的な設計を挙げ、ヴァリニャーノが「大身の客」を接待する条件として、茶の湯に加えて懷石料理も不可欠なものと認識していたことを示した。

④『日本イエズス会士礼法指針』一六九項目を挙げ、来訪者を清潔な茶室と座敷で接待するというヴァリニャーノの命令を再度示した。茶の湯は当時の社交儀礼であつたため、イエズス会の中でも

これを採り入れるというヴァリニャーノの意図を明らかにした。

⑤『日本イエズス会士礼法指針』四五項目を挙げ、ヴァリニャーノが茶の湯を専門とする奉仕者を修道院に住ませ、二、三種類の茶の備えや読み書きなどの茶の湯関連事項に専念させるといふ命令が下されていることを指摘した。

岡田氏が『日本イエズス会士礼法指針』から四項目を挙げ論じた部分は、本研究によればいずれも日本の習慣や風習に沿ったヴァリニャーノの「適応主義」に基づいた宣教方針に当たり、本書では第五章第二節「イエズス会修道院内の茶の湯によるもてなし」にて扱う。岡田氏の記述によれば、ヴァリニャーノの方針は『日本イエズス会士礼法指針』に示されているように「茶の湯について深く理解し（中略）住院に客を招き（中略）住院の内部に正式な茶室の設備さえ設けられていた」というものである。⁽¹⁰⁾

しかし岡田氏は、「住院の建築に当って茶室を設けるべきだというようなヴァリニャーノのこの提言が果してそのとおり実現したかどうかは明らかでない」とも記述している。⁽¹¹⁾なぜならば、『日本イエズス会士礼法指針』は、同会が織田信長の支援を受け布教の最盛期に作成されたものであるため、本能寺の変以降の豊臣政権下におけるヴァリニャーノの宣教方針に関しては、想像の段階に留めたのである。

本書では岡田氏の先行研究に基づき、さらに以下、三点について論証する。一点目は、岡田氏が

扱った『日本イエズス会士礼法指針』のほかに、ヴァリニャーノが一五九二年（天正二〇）文禄元）に作成した「日本管区規則」に収録されている茶の湯関連の史料や日本イエズス会協議会議事録を提示して、彼の意図した修道院内の茶の湯や宴席は、日本の儀礼慣習にしたがいがい、身分に応じた接待であったことを論証する。特に本書では、ヴァリニャーノが修道院を訪れる人々に対し、茶の湯にてもてなすための態勢作りを整えていたことを明らかにしたい。このことにより、岡田氏が著書の中でヴァリニャーノの提言の実現性は不明である旨を指摘していることに対し、本書においては『日本イエズス会士礼法指針』が作成された一五八三年（天正一一）以降の史料を挙げ、巡察師の提言は実現された可能性が大きいことを明らかにしたい。

二点目は、ヴァリニャーノやほかの宣教師が見定めた茶の湯の精神的側面についても、史料を挙げて明らかにしたい。ヴァリニャーノは茶の湯にはもてなしのほかに、修行という精神性を鍛える目的があることを認識し、これを同宿という奉公人に行わせていたと考えられる。「日本管区規則」の中には、茶の湯によるもてなしが、単なる接待ではなく、来客に心を尽くすという精神性をも示す掟が記されている。ゆえに、茶の湯関連規則を扱い、修道院内の茶の湯というものが、当時の茶人が嗜んだわび茶という精神性に重きを置くものに匹敵していた可能性を検討する。

三点目は、ヴァリニャーノが『日本イエズス会士礼法指針』の中で示している修道院や聖堂の設計と、当時の絵師によって描かれた南蛮屏風図にみられるイエズス会施設の構図とを照合して、建築に

ついても適応主義に基づいた方針であったことを具体的に示す。

本書では、ヴァリニャーノが意図するイエズス会のもてなしを検証するにあたり、その実態を具体的に明らかにするのみならず、いかに彼が、茶の湯による接客を重視していたか、茶の湯に関する深い知識をもっていたことについても明らかにするものである。

○イエズス会文書の日本語への翻訳

松田毅一氏は、ヴァリニャーノのスペイン語によるイエズス会総長への報告書「日本管区及びその統轄に属する諸事の要録」と同書「補遺」の二文書を『日本巡察記』と題して日本語に訳し、当時の茶の湯事情を明らかにした。松田氏らの功績により、ヴァリニャーノが茶の湯を重視していたことや同宿と称する日本人奉仕者を修道院に駐在させ、茶の湯の世話をさせていたことがわかった。⁽¹²⁾さらに、彼が大友宗麟や堺の豪商日比屋了珪所持の茶道具について、それらの価値を理解できないという記述は、先ほどの泉澄一氏をはじめ、角山榮氏などの研究者によって言及⁽¹³⁾されている。

また松田毅一氏は川崎桃太氏と共に、イエズス会宣教師ルイス・フロイス (Luis Frois, S. J., 1532-1597) の『日本史』をポルトガル語から日本語へ翻訳した。その中には一五六五年(永祿八)のルイス・アルメイダ (Luis de Almeida, S. J., 1525-1583) による、日比屋了珪主催の茶会体験報告⁽¹⁴⁾や、一五六九年(永祿二二)のフロイスによる、京都に住む茶人ソウイ・アンタンの茶室でミサを捧げたと

いう報告がある⁽¹⁵⁾。両氏の貴重な翻訳を通し、二人の宣教師が茶の湯の清浄さを認識していたことが明らかとなった。

矢沢利彦氏他は、ヴァリニャーノが作成した『日本の習俗と気質についての注意と助言』(Advertimentos e avisos acerca dos costumes e catangues de Jappao) のヨゼフ・ランツ・シュッテ師によるイタリア語訳を (*Il Cerimoniale per i Missionari del Giappone*) 『日本イエズス会土礼法指針』と題して、日本語訳にて発行した⁽¹⁶⁾。その結果、先の岡田章雄氏の研究が示したように、ヴァリニャーノが宣教方針の中に茶の湯を盛り込んでいたことの詳細が明らかとなった。

茶の湯研究に貢献した邦訳といえ、土井忠生氏他によるジョアン・ロドリゲス通辞⁽¹⁷⁾ (Rodrigues Tczuz. S. J. 1661-) の記した『日本教会史』のポルトガル語から日本語への翻訳がある。その中には茶の湯諸事情に加え、茶室や露地、宇治の茶業など、ロドリゲスによる膨大な情報が収められている。土井氏らの功績により、当時の茶の湯文化の様相が明らかとなった。

以上のごとき茶の湯研究の状況において、筆者は一五六〇年(永禄三)以降にイエズス会宣教師が堺を訪れ、経済的成長を遂げ活気にあふれた都市の様子を目撃し、さらには最盛期を迎えた茶の湯文化に遭遇したという歴史的事実に注目した。彼らが布教を目的に来日して日本について調査する中で、特に注目を引いたものの一つが、当時武士階級や堺の都市、京の都などに住む町人を中心として盛んに行われていた茶の湯であった。ルイス・アルメイダは報告書の中で、最盛期を迎えた堺の都市で練

り広げられた茶の湯文化に驚嘆した様子を書き残している⁽¹⁸⁾。さらに、ジョアン・ロドリゲス通辞は繁栄した堺の都市の様相と共に、茶の湯文化や精神性についての情報収集と分析を行ったのである⁽¹⁹⁾。

日本イエズス会は適応主義にしたがい、当時日本で流行した茶の湯を宣教方針の中に採用していた以下の実態を論証する。すなわち、ルイス・アルメイダ、ルイス・フロイス、ジョアン・ロドリゲス通辞、そしてアレックスandro・ヴァリニャーノという段階を経て、イエズス会は日本人が儀礼慣習として重んじていた茶の湯を、修道院内にも採り入れて来客をもてなしていた。

あとがき

本書は「アレクサンドロウ・ヴァリニャーノの意図した適応主義に基づく茶の湯」と題して、二〇一四年三月に関東学院大学大学院に提出した博士論文をもとに再編成したものである。特にイエズス会文書の中から、接客関連規則の日本語訳を史料としてそえることで、イエズス会が日本の習慣に適した布教の重要性を認識していたことを解明した。

そもそも茶の湯とキリスト教の交流に関する研究の発端は、茶道裏千家第十五代家元の千玄室大匠が数々の著書の中で論じておられる茶の湯とキリスト教の相互関係を拝読し、感銘を受けたことに基づく。

また今日振り返れば、三重県伊賀市（旧上野市）に住んでいた祖父母がキリスト教信者で、祖父はプロテスタントの牧師で、祖母は同市で茶道表千家の教室を開いていたことも、茶の湯とキリスト教に関する研究について興味を抱いた要因といえる。祖母の茶道に取り組む姿勢と、神様に祈る姿が重なっていた印象を覚えている。

筆者は異文化コミュニケーション分野に大変関心がある。アメリカ留学で得た経験はもとより、帰国後には米海軍に職を得ることができ、引き続きアメリカ社会に身を置いているためである。現在は米海軍厚木基地に配置する第七艦隊七二任務部隊の渉外を担当している。アメリカ人と日本人の橋渡しになりたいという志を持ち、日々の公務の中で、異文化相互理解の重要性を学ばせていただいている。このこともまた、外国人のみた茶の湯について研究したい要因であるといえる。

大学院在籍中は、論文を完成させるまでに多くの方々のご指導と励ましをいただいた。ここに深く御礼申しあげたい。博士論文の主査をお引きいただいた森島牧人教授には、論文指導のみならず論文提出に至るまでの諸事情に関し、折々にご教示を賜った。副査にてお世話になった矢嶋道文教授には、茶書を扱う際に古文書の読み下しや現代語訳に関し細かいご指導をいただいた。同じく副査としてご指導にあたってくださった多ヶ谷有子教授には、修道院の歴史や伝統、そしてキリスト教に関しご教示をいただいた。

茶道裏千家今日庵文庫文庫長の筒井紘一教授には、宝塚大学（旧宝塚造形芸術大学）の修士課程に在籍した頃より今日に至るまで、引き続き、不肖の弟子のために多大な学恩をいただいている。大変ありがたいことである。博士論文ではご多忙の中、副査として茶の湯研究分野についてきめ細かなご指摘とご指導を賜ることができた。

日本イェズス会日本管区長の梶山義夫師には、ローマイエズス会文書館宛に紹介状を送っていた

き、幸いにして同館への立ち入りと史料を収集することができた。ポルトガル研究調査旅行に際しては、横浜市にお住まいの眞實井亮忠様ご夫妻のお計らいで、徳島日本ポルトガル協会会長桑原信義様と三木レイ子様、駐ポルトガル共和国日本国特命全権大使の四宮信孝閣下をご紹介いただいた。渡航までの期間は、当大使館公使の高川定義様よりポルトガルの情報をご提供いただき、日本で十分な準備ができた。

大谷大学の狭間芳樹先生には研究当初より、適応主義についてご教示いただいた。さらに、リスボンのアジュダ王宮図書館宛に紹介状をいただき、首尾よく同館にて貴重な史料を収集することが適った。同館では、司書の Fatima Gomes 氏より史料を提供していただいた。

ヨーロッパで収集した原文史料の翻訳では、筆者のポルトガル語教師で東京外国語大学 *União de Sousa* 特任准教授に多大なるご指導を賜った。特に筆者が日本語に訳す際には、個々の単語をポルトガル語の辞書を用いつつ丁寧に教えていただいた。

日本二十六聖人記念館館長のレンゾ・デ・ルカ師には、結城文庫への利用許可をいただき、貴重な文献に目を通すことができた。

筆者はイエズス会士が堺の都市を訪問している事実に基づき、当地にて数十回にわたる研究調査を行った。堺市博物館の前館長角山榮和歌山大学名誉教授（二〇一四年一月ご逝去）には、国際貿易都市として繁栄した堺の都市についてご指導いただいた。堺市立泉北すえむら資料館の森村健一前館長

には考古学の観点から堺の茶の湯文化に関してご教示いただき、厚く御礼を申しあげたい。堺市博物館の吉田豊学芸員・増田達彦学芸員・續伸一郎学芸員・矢内一磨学芸員には、同館所蔵の史料および文献についてご教示いただいた。矢内氏には博士論文で終わらず、本を出版するようにと励ましを賜った。前田秀一氏には以上の方々との面会調整をしていただき、さらに堺市の歴史的行事にお誘いいただいた。

倉澤行洋教授には、宝塚大学大学院にて修士論文のご指導を通して、茶道の国際的貢献についてご教示いただいた。最近では励ましのお手紙をいただいた。野村美術館館長の谷晃先生には一六世紀末の茶の湯の様相についてご指導いただき、加えて『野村美術館研究紀要』への投稿掲載へとお導きいただいた。宇治・上林記念館館長、上林春松氏には『日本教会史』に記されている製茶作りに関してご指導いただいた。製茶の研究をまとめられた報告書をご提供いただいた。

本書の刊行にあたって、画像の掲載をご快諾いただいた南蛮文化館理事長の矢野孝子様と、多賀神社様、ローマイエズス会文書館様に対しては、あらためて御礼を申しあげたい。

このたびの本書の出版に関しては、筒井紘一教授に多大なるご教示と励ましをいただいた。深く感謝の意を申しあげたい。

思文閣出版をはじめ、本書を担当された原宏一氏にお礼を申しあげたい。ご多忙の中、専門知識による確なご指導によって出版へと導いていただいた。執筆の機会をいただき感謝する次第である。

カトリック信者の飯島章子氏（二〇〇四年四月帰天）には、最後まで励ましのお言葉とお祈りで支えていただいた。心より感謝申しあげたい。

私事になるが、研究を見守ってくれた両親に感謝したい。二〇〇六年に天国へ旅立った父は勉学に厳しく、金や物は奪われることがあっても知識は失われることがないと、学問の大切さを教えてくれた。最後に全面的に支援してくれた米海軍潜水艦隊の軍人であった夫ジョージに感謝したい。ポルトガル語から英語に訳された史料を丁寧^に校閲してくれた。軍隊の規律が茶の湯の精神性にも共通していると感じ、現在では筆者と共に茶道を学んでいる。

茶道は世界に誇れる日本伝統芸術であり、多くの外国の方々に体験していただくことを切に願う。

二〇一六年一月

スムットニー祐美